5 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 5 月 14 日（日）10：30－11：30　復活節第 6 主日
■説　教：　保科けい子 牧師
■説教題：「　これほどの信仰　」
■聖　書：ルカによる福音書 7 章 1～10 節（新約 p114～115）
■讃美歌：58「　み言葉をください　」
　　455「　神は私の　強い味方。　」

本日の箇所は、「イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから」と語り出されています。それは 6 章の 20 節から終わりまでに記されている内容をさしており、マタイによる福音書 5 章から 7 章までに記されている「山上の説教」に対して「平地の説教」と呼ばれるものです。それに続いて、7 章からは再び主イエスの活動を語る部分になっています。本日の箇所の舞台はカファルナウムです。この町にはシモン・ペトロの家もあり、主イエスのガリラヤにおける活動の拠点となっていました。この町にいた百人隊長から、主イエスのもとに使いが来たのです。この百人隊長は、5 節から 6 節を読むとユダヤ人ではなく異邦人であったことがわかります。このことが本日の箇所ではとても重要なのです。その百人隊長が、3 節にあるようにユダヤ人の長老たちを主イエスのもとに使いとして送ってきたのです。「ユダヤ人の長老たち」とは、このカファルナウムの町の指導的な立場にあり、ユダヤ人たちの中心にいる有力者たちでした。その長老たちが、異邦人である百人隊長の使いとなって主イエスのもとに来たというのです。その使いの内容は、百人隊長の部下が病気で死にかかっているので助けに来て欲しい、というものでした。おそらく、この部下は百人隊長にとって大切な存在だったのでしょう。百人隊長はカファルナウムで行われていた主イエスの御業、すなわち、病人の癒しや悪霊追放などの奇跡を見聞きしていたので、自分の部下が病気で死にかけている時、主イエスにすがろうとしたのです。そして、長老たちも喜んでその頼みを引き受けたことが 4、5 節から分かります。彼の願いを聞いてくれるように、長老たちは主イエスに熱心に願っています。どうして異邦人である百人隊長のためにそんなに熱心になるのか、と言えば、この百人隊長は異邦人の軍人であるのに、ユダヤ人たちの信仰に理解が深く、この町の会堂を建ててくれたのです。会堂というのは、ユダヤ人たちが集まって礼拝をする場所です。その会堂を建ててくれたというのは、驚くべきことだったと思います。だからこそ、長老たちは「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です」と熱心に願ったのです。

ところが、彼らと一緒に出かけられた主イエスが百人隊長の家の近くまで来た時、今度は百人隊長の友人たちがやって来て、「主よ、ご足労には及びません」と言ったのです。本来ならば本人が出向いて来てお願いすべきなのに使いの者を送って「部下を助けに来てくだ

さるように頼んだ」のに、近くまで行くと「ご足労には及びません」とはどういうことでしょうか。この百人隊長は自分の権力を振りかざして気ままにふるまうとんでもない人物だ、と考えることもできます。しかし、この話の中心は、この百人隊長が考えていることが記されている 6、7 節の彼の言葉にあるのです。百人隊長は「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました」と語っています。彼が主イエスを家に迎える資格がない、自分はふさわしくないと言っているのは、自分が異邦人でイスラエルの神様の民ではない、ということなのです。当時は、生まれが異邦人であってもユダヤ人となる儀式を経ることによりユダヤ教に改宗するならば、神様の民の一員となることができたのです。しかし、彼はそれをしていませんでした。だからこそ、実際に主イエスが近づいて来られると、自分は主イエスを家にお迎えできるような者ではない、ということに彼は深く気づかされたのです。それでも彼は、何とかして主イエスに自分の大切な部下を助けていただきたいと思いました。病気で死にかかっている部下を助けることができるのはこの方しかいないと確信しているのです。そこに、彼の深い葛藤がありました。

しかし、この百人隊長は気づいたのです。7 節後半に。彼が友人たちを通して主イエスに願った言葉が記されています。「ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてください」と願ったのです。主イエスに自分の家まで来ていただくことも、自分が出かけていくことも、どちらも自分にはその資格がないと本心から思っていたのです。しかし、ひと言お言葉をいただくだけなら異邦人である自分にもできる、そして、そのお言葉さえあれば僕の病気は癒される、そう彼は確信したのです。それは、彼が主イエスの言葉の権威と力とを信じていたからです。主イエスがひと言お語り下さればそれは実現する、という御言葉の権威と力への信頼を彼は抱いていたのです。8 節に「わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」とあります。彼は軍人ですから、上官の命令通りに兵卒が直ちに行動する、という規律のもとにこれまで生きてきました。そして彼は百人隊長ですから、百人の部下を率いていて命令を下す立場にいます。彼の命令に、百人の部下たちが直ちに従うのです。戦場では、その百人の命が彼の命令如何にかかっています。自分の発する言葉が部下の命を左右するのです。つまり彼は、命令する権威を持つことの重い責任と、そこで語られる言葉の重さをよく知っていたのです。また、この時も彼自身の上にも上官がいて、その権威と命令に従っている状況でした。そういう中で、権威ある者が語る言葉の重さというものを充分に知っているのです。彼は、そのような日々の経験の中から、主イエスの語られる御言葉の権威と力とを信じることができたのです。

9 節に、「イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。」

と体の向きを変えられたことが具体的に描かれ、続いて「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」とお語りになった言葉が記されています。主イエスがこれほどの褒め言葉をもってその人の信仰を認めておられる個所は、４つの福音書を読んでも他にはなかなか見当りません。ところで「これほどの信仰」とはどのような信仰なのでしょうか。それは第一には、異邦人である自分は神様のみ前に出るのにふさわしくない、と彼が心から認めていることです。つまり、神様の民であるイスラエルと異邦人の隔たりを彼は真剣に受け止め、その上でなお、主イエスの救いを切に求めているのです。その葛藤の中で彼は、主イエスのみ言葉の権威と力を信じるという救いの道を見出したのです。この箇所を、私たちの現状に照らし合わせて、洗礼を受けたクリスチャンでなくてもクリスチャン以上に信仰深い人はいるのだ、と考えてしまうと、聖書の語る救いの道から遠ざかってしまうかもしれません。そうではなく、自分が神様の救いにあずかるのにふさわしくないということをはっきりと知っている所にこそ、本当の信仰が与えられるということを、この百人隊長の姿と言葉から私たちは読み取っていきたいと思います。

　そしてルカによる福音書は、後に主イエスの十字架の出来事を描く中で、２３章の４７節において「百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した。」と記しています。ここでの百人隊長が、本日の箇所に出てくるカファルナウムの百人隊長と同一人物とは思えませんが、百人隊長という立場の人物に信仰告白の言葉を語らせているところに、ルカによる福音書の著者の語る救いが聞こえてくるように思います。そして、私たちもまた、カファルナウムの百人隊長や主イエスの十字架のもとに立つ百人隊長と共に、主なる神を心から賛美したいと願います。